

## 蘭 田 坦 著『〈無限〉の思惟——ニコラウス・クザーヌス研究』

創文社，1987年，vii+356+7頁

大 出 哲

まず中<sup>なか</sup>埜<sup>のはぢむ</sup>氏の書評『無限に憑かれた思索』（『創文』284号，1987年12月）を読んでいただきたい。その第一部は、蘭田新著の構造を、西欧における哲学の伝統的な体系構成に準拠して説明し、新著の価値は、その作業過程に費された知的誠実にあるとする。第二部は、無限忌避型哲学者と無限沈潜型哲学者にふれ、後者の流れの中のクザーヌスの特徴をあらわにする。以下は中埜書評への蛇足である。

本書の構成は次の通りである。

- 1) 序章——無限を囲むくゝの意味
- 2) 第一章～第三章——クザーヌスの思惟の構造と特質（*philosophia formalis* に当たる）
- 3) 第四章～第七章——クザーヌスの形而上学的思想体系（*philosophia realis* に当たる）
- 4) 付論——クザーヌスと関わりの深いルネサンスの宇宙論

序章——*docta ignorantia* の立場とは、無限と有限とが限りなく断絶する限り、有限なる知は無限には決して届きえないことをわれわれは知る、という「無知の知」を媒介としながら、どこまでも無限を思惟することである。この無限の思惟は、(1)無限そのものを思惟すること、(2)いっさいを無限なるものとして思惟すること、(3)「無知の知」に立脚する限り思惟自体が無限なる思惟という性格を帯びること、を意味する。この三重の意味を含む無限を表示するのが、無限を囲むくゝである。

第一章「*docta ignorantia* の立場」——人間の広義における知的活動が何らかの限界に直面するとき、知の能力が改めて反省的に吟味され、当面妥当していた知が、その不確実性あるいは非真理性のゆえに否定される。さらに、知自身の否定（すなわち無知）は、否定としてどこまでも徹底され自覚的に受け止められることにおいて、ひるがえっ

て積極的な意味を帯び、そこから何らかの意味でのより高次の真理（知）の場が開かれ、そこに向かって飛躍が生じることになる。この中には、三つのアスペクト——(1)知の否定、すなわち無知 *ignorantia* の面、(2)無知を知る (*docta*) という面、(3)無知の知によって開示されるより高次の場との関わりという面——が認められる。(1)第一アスペクトからの考察により、「無限なるもの」は言うまでもなく、「有限なるもの」も無知の圏内に引き入れられることになる。(2)第二アスペクトからの考察により、ソクラテスの「無知の知」とクザーヌスの *docta ignorantia* との相違が明白にされる。ソクラテスの場合は、「無知を知る」ということにとどまったが、クザーヌスにおいては、無知そのものを通じて新たなものがさらに探究される。(3)第三アスペクトからの考察により、無知の覚知において出会う「無限なるもの」への関わりは「非把握的な仕方での把握」*incomprehensibiliter amplecti* によってなされることが分かる。

第二章「*docta ignorantia* の論理」——臆測 *coniectura* という思想が *docta ignorantia* の立場の不可欠の要素であることが説かれ、臆測の術 *ars coniecturalis* がテキストに基づいて詳論される。精神は自分自身のうちから第一の一性 (1)、第二の一性 (10)、第三の一性 (100) および第四の一性 (1000) を展開する。これら四つの一性は、一性と他性の相互透入という内的動因によって相互に区別されながら結合される。このために *participatio* という事態<sup>ザツヘ</sup>が生じる。この事態は、*Deus, intelligentia, anima, corpus* という形而上学的秩序にそのまま転移される。こうして、神もまた精神の臆測的認識の圏内へと引き入れられることになる。

第三章「数学的なものの意味」——まず *imago* の概念規定がなされる。「*imago* は、それ自体としては有限なるものでありながら、それ自身のうちから無限なるものを現出せしめ、それを通じて無限なるものへのアプローチを可能ならしめるものである」。次に、それ自体としては「有限なるもの」である「数学的なもの」のうちに無限なるものの *imago* を見いだすために、「無限への転移」という認識操作が、三角形を使用して厳密に展開される。

第四章「神と世界の関係」——神は「無限なるもの」であり、世界は本来「有限なるもの」である。「無限なるもの」と「有限なるもの」との間には *proportio* は存しない。しかし、創造者と被造物という信仰の所与に基づく *relatio* は説明されなければならない。無限で最大な一性である神は、自らの特性である充溢 *abundantia* によってまず

「宇宙という一なるもの」を、次に「あのもの」「このもの」という「一なるもの」を展開する。ここに縮限 *contractio* という情況が生じ、神と個物の存在性は「絶対的存在性と縮限的存在性」と言われることになる。こうして、個物の存在は二重のアスペクトにおいて見られることになる。個物は、一方では絶対的の最大である神との関係というアスペクトにおいて、他方では縮限的の最大である世界との関係というアスペクトにおいて見られることになる。ここで絶対的の何性と縮限的の何性という対概念が形成される。個物の絶対的の何性は神であり、縮限的の何性は世界であるとされるのである。さて、縮限という情況のもとで神は世界を媒介として万物の中にあることが見られるが、同じ情況のもとで万物が世界を媒介として神の中にあることが見られねばならない。ここに、展開 *explicatio* の対概念として包括 *complicatio* が登場してくる。

第五章「宇宙論の基礎」——有限球を無限へと転移することによって無限球を導き出し、これをさらに神的無限のものへと転移するという「上昇の道」によって得られた数学的象徴を、絶対的一性から縮限的一性へと向かう「下降の道」へと移すとき、「有限なる無限性をもつ球」という宇宙の形態が得られる。無限球においては「その中心はいたるところにあり、その周はどこにもない」というヘルメス思想は、クザーヌスにおいてはそのまま現実的な宇宙のあり方とみなされる。その結果、宇宙には固定的な中心がないことになり、宇宙内の万物は相互に休みなき相対運動の中にあることになる。

第六章「人間の問題」——*De docta ignorantia Liber I* の中心問題である神は「絶対的の最大」*maximum absolutum* と呼ばれた。また、*Liber II* の主題である世界は「縮限的の最大」*maximum contractum* として捉えられた。これら二つの概念から論理必然的に「縮限的にして絶対的な最大」*maximum, quod simul est contractum et absolutum* という概念が *Liber III* の *Leitmotiv* として導き出される。「縮限的にして絶対的な最大」とは、世界内の縮限的個物の一つでありながら、神に通ずる絶対的という特質をかね備え、しかも何らかの意味でいっさいを包含するものと言いうるものである。このようなものがもしありうるとすれば、それは、下位の本性と上位の本性との結合のための媒介 *medium* である「中間の本性」*media natura* でなければならない。それは人間本性 *humana natura* でなければならない。とは言っても、このことは任意の縮限的個人において現実化されるわけではない。このことが現実化されるのは、人間の本性を完全に具現した人間だけに限られる。それはイエス・キリストである。イエス・キ

リストこそは、神と世界の結合を成就し、従って宇宙の完成をもたらすべき媒介なのである。こうして、*Liber III* の人間論はキリスト論へと帰着していく。

*mens* は、人間の知的活動の全体 (*intellectus* を中心に *ratio* および *sensus* の能力のすべて) を含む一つの実体的存在として、神の「包含的な単一性」*simplicitas complicans* の「写し」*imago* である。しかも、「一性の相等性」*aequalitas unitatis* という意味での「写し」である。つまり、*mens* は神の「包含的な単一性」の直接的な写しなのである。他方において *mens* は諸事物の範型であるがゆえに、諸事物は *mens* の写し *imagines* であることになり、*mens* を媒介として間接的に神に結びつく。つまり、諸事物は *mens* を媒介とする神の写しであることになる。こうして *mens* は、諸事物の媒介者として、いわば神の子イエスの地位を獲得することになる。

第七章「精神と認識」は、*De mente* の句「精神は、あらゆる観念的形相を欠いていますが、外的な刺戟を受けることによって、あらゆる形あるものにそれ自身を同化すると共にあらゆる事物の観念を形成する力なのです」(n. 78, 7-9) を手がかりとして詳細に展開されるが、紙面の都合上割愛させて頂きたい。

付論においては、アリストテレス-ブトレマイオス的な「閉じた世界」に無限宇宙観を導入した先駆者としてニコラウス・クザヌスとジョルダノ・ブルーノが挙げられ、彼らの宇宙論が展開されているが、その詳細は割愛させて頂きたい。

これらの論究はすべてテキストからの膨大な引用と六十数冊の参考文献による傍証によって固められ、異論をさしはさむスキがない。いかめしい論題ではあるが、やさしくかみくだいた論述は、クザヌスの学的情熱をも伝えて深い感動をひき起こしながら、読者をクザヌスの思惟の中核へと引きずっていく。また、詳細な文献表と用語索引は、研究者にとって極めて有益である。この書物はまさに日本におけるクザヌス研究の牽引車である。